

ヴァージニア・ウルフ「気持ちを寄せて、こころ離して」 (『幽霊屋敷』から)

A Translation of Virginia Woolf's "Together and Apart"
from *The Haunted House* (1945)

坂本正雄
SAKAMOTO Masao

2003年10月8日受理

ダロウェイ夫人はその人たちを紹介して、この方のこと、きっとお気に召してよと言いました。あいさつの言葉もないうちから、おしゃべりは始まっていました。ミスタ・サールとミス・アニングはふたりとも空を見上げていました。空は、ふたりの心にその意味を、そそぎ込んでいました。もちろん、違う意味ではありましたが。でもミス・アニングにはミスタ・サールがそばにいるということがはっきり感じられてきて、空を、ただそれだけを見ることがこれ以上できなくなってしまいました。見えるのは、高い背丈、黒い目、白い髪、握りあわせた両手、ロデリック・サール独特の、厳しい憂鬱な（それは「うわべだけのことなのよ」と教えられてはいましたが）顔に、空に、支え上げられた空でした。間の抜けた言い方とは思いながらも「きれいな夜ですこと」と言わずにはおれない気分になったのでした。

間が抜けてるわ。馬鹿みたいに間が抜けてるわ。でも四十になって、空を目の前にして間抜けになっちゃいけないのなら。空というはどんな利口な人も愚鈍にするわ。藁のほんの一握りにしてしまうわ。こうしてダロウェイ夫人の家の窓辺に立っていると、わたしとミスタ・サールでさえ微塵、ほこり。月の光で見れば、人生も虫けら同様の短さ、同様のつまらなさにしてしまう。

「さあ。」ミス・アニングはソファの上のクッションを強く叩いて言いました。ミスタ・サールは横に座りました。みんなが言うように「うわべだけ憂鬱そう」なのかしら。空の力を感じながら、それは言うこと、なす事、幾分つまらないものに見せるようで、ミス・アニングはまったくありふれたことをまた言ったのでした。

「子供の頃カンタベリに住んでまして、そのころミス・サールというかたがいらっしゃいましたわ。」

ミスタ・サールには空のことが頭にありましたが、先祖のお墓が、物語に出てくるような青い光の中に突然、現れてきました。目が大きく広がり、暗くなって、ミスタ・サールは答えました、「ええ。」

「もともとはノルマンの出で、征服王〔訳注:1066年イングランドを征服したWilliam I世〕と一緒に渡ってきたんですよ。それがリチャード・サールで、大聖堂〔訳注:カンタベリの大聖堂。現在、英国国教会総本山〕に埋葬されています。ガーター勲爵士〔訳注:1348年、Edward III世により制定された最高勲章〕だったんですよ。」

ミス・アニングはたまたま男の真実の姿にぶちあたったという気がしました。うわべだけの姿がその上に重ねられているんだわ。月の光のために（月はミス・アニングには男を意味していました。カーテンの透間からその姿が見えて、その光を浴びていたのです）、ほとんど何でも言うことができました。うわべの姿に隠れた本当の男を掘りだそうと決めて、こころの中でこう言いました。「つづけて、スタンリー、つづけて。」それはミス・アニングの合い言葉、秘密の蹴爪、秘密のむちでした。中年になったものが、なかなか直らない病気を追い出すときによく作り出すようなものでしたが。ミス・アニングの病気は嘆かわしいほどの臆病、むしろ怠惰でした。勇気がないというよりも、精力がなかったのです。とくに男と話すときに。男に対してミス・アニングはひどくおびえました。それでたびたびおしゃべりがつまらない決まり文句に惰していつてしまうのでした。ミス・アニングには男友達もほとんどありませんでした。心を打ち明けて話し合える友達はほとんどいないわ、ミス・アニングはそう思いました。でも結局のところわたしには男が必要なのかしら。いらないわ。わたしにはセイラ、アーサー、小さな家、チャウチャウ犬、それからもちろん、あれがあるもの。ミスタ・サールのそばに座っていても、あの感じ、家に帰るときに抱くあの感覚、なにかを、いっばいの奇跡を手に入れたという感じに、自分を浸し、浸りきって、そう思いました。そうした感覚はほかのひとが感じているとは思えませんでした（アーサー、セイラ、小さな家、チャウチャウ犬を飼っているのはわたしだけだもの）。ミス・アニングはまた所有の深い満足感に身を浸し、このことや月（月というのは音楽だわ）やらで、この男から離れ、サール家の自慢を聞かないままにしておくこともできると思いました。だめよ。それが落とし穴だわ。無気力に落ち込んでしまっただけじゃないわ。この歳ではだめよ。「つづけて、スタンリー、つづけて。」ミス・アニングはそう思い、ミスタ・サールに尋ねました。

「カンタベリはご存じですの。」

カンタベリはご存じですのだった。ミスタ・サールはほほえみました。なんてばかげた質問だろうと思いました。世間知らずなんだな、この物静かですてきな女。なにか楽器を弾いて、賢そうな顔つきで、目もいいし、古いすてきなネックレスをつけている。この女は自分がなにを言ったかわからないのだ。カンタベリはご存じですのなどと尋ねられるとは。あのころは、人生のうちで一番いい時期だった、あらゆる思い出、誰にも言うことができずに、書こうとはしてみたもの、そうだ、書こうとはしてみたのだ（ミスタ・サールはため息をつきました）ああ、すべてのことはカンタベリが中心なのだ。ミスタ・サールは声を上げてわらいました。

そのため息、それから声高の笑い、その憂鬱、ユーモア、こういうもので、みなはミスタ・サールが気に入るのです。ミスタ・サールはそのことを知っていました。でもいくら人に気に入られ

でも失望の埋め合わせにはなりません。人の寄せてくれる好意をたのみにするとしても(気のあった女性たちの家を長い時間、長い長い時間訪問したり)、それは半ば苦い思いを伴っていました。というのもミスタ・サールは、カンタベリで過ごした子供時代、やろうと思えばできたであろうこと、しようと夢に描いたことの十分の一もやらなかったからなのです。見知らぬものの前では希望がよみがえるのを感じました。約束したことをしなかったなどと言えるものはいないからです。自分の魅力に負けるものがあれば、それは自分にとっては新しいきっかけとなるのです。五十歳でも。ミス・アニングは源泉に触れました。野原、花、灰色の建物、それらがミスタ・サールの心に一滴ずつしみてきました。やせ衰えて暗い心の壁に銀の雫を形作りました。そして落ちていきました。そうした絵が心に描かれてミスタ・サールの詩は始まるのでした。物静かな、この女のそばに座って、心の中に絵を描き出したい気持ちをミスタ・サールは感じていました。

「ええ、カンタベリは知ってますよ。」ミスタ・サールは思い出に浸るように、感傷的に、控えめな質問を、ミス・アニングにはそう感じられたのですが、誘いだすように言いました。そしてそういうことで、ミスタ・サールが多くの人には興味深いものに思えるのでした。サールの側の、こうした異常なくらいの話しかけ安さ、反応の良さこそが身の破滅の原因でした。こうしたパーティの後、飾りボタンを取り出し、鍵や小銭を化粧台の上に置くときにミスタ・サールはそう思うのでした(社交の時期になるとほとんど毎晩出かけることもありましたが)。そして朝食に降りてゆくとき、全くの別人になりかわり、テーブルでは妻に向かって、不機嫌で不愉快な顔をしているのでした。妻は病弱で外出はしませんでした。でも時には見舞いに来てくれる古い友達はいました。大部分は女友達で、インド哲学にこっそりみたり、治療法や医師を変えてみたらとってくれるのでした。そうしたものにはロデリック・サールは痛烈なけんつくを口にするのでした。それはあざやかなもので、妻は穏やかにいさめるか、涙のひとつふたつを流すくらいしかできませんでした。おれは失敗者だ。ミスタ・サールはたびたび思いました。社交、女とのつきあい。これらはどうしても必要なもので、断ち切ることができませんでした。それからものを書くこともできませんでした。人生というものに深くかかわりすぎていました。この辺で足を組もう(ミスタ・サールの動きはちょっと型にはまらないもので、品のあるものでした)。それからもう自分を責めまい。自分の、この豊かな性格のせいだ。たとえばワーズワースのと比べてみれば、ずっといいのだ。これまでひとには多くのものを与えてきたのだから、顔を両手に載せて、ミスタ・サールは思うのでした。今度はみんながおれを助けてくれる番だ。これがおしゃべりの前口上だ。びくびくものではあっても、おもしろそうで、わくわくする。いろいろな思いがミスタ・サールの胸をよぎりました。

「あの人、果物の木みたいですね。花盛りのサクランボの木だ。」きれいな白髪、若作りの女を見て、ミスタ・サールは言いました。これはいいたとえだ。ルース・アニングは思いました、かなりいい。でも、特異な身振りで話す、品のいい、憂鬱そうなこの男のことが気に入ったのか、自分でも分かりませんでした。でもおかしいわ、人の感情が影響を受けるものだなんて、ルース

は思いました。女をサクランボの木にたとえるのは気に入りましたが、この男は気に入りませんでした。神経の筋があっちこちと気ままに、まるでいそぎんちゃくの触手のようにぶるぶる震えたり、はじかれたり、動き回っているのです。頭脳は何マイルも離れ、空中で、冷たく、無感覚になり、そのうちかいつまんだ形にした情報を受け取るのです。それでロデリック・サールのことを人が話すと（サールはなかなかの人物であった）、ためらいもせずこう言うのです。「気に入りましたわ。」あるいは「いやな人だわ。」そしてその言葉は永久に既成のものとなってゆくのです。変な考え、でもまじめな考えだわ。人間関係が何で成り立っているかに青信号を投げかけるのだから。

「カンタベリをご存じなんて、妙ですね」ミスタ・サールは言いました。「いつも、びっくりします。」ミスタ・サールは続けました。（白髪の老婦人が通り過ぎました）。「ある人には大きな意味を持つもののはしっこに触れる、ふと触れる人に、いはば偶然に出会えば、いつも驚きです。」（ふたりは以前、出会ったことはありませんでした）。「だってカンタベリというのはあなたには古きよき町以外の何ものでもなかったんでしょう。で、おばさんか誰かのところでひと夏を過ごしたわけだ。」（それこそ、ルース・アニングがカンタベリ旅行のことでいおうとしたことでした）。

「観光地を見て回り、こちらに帰ってきて、もう二度と思い出すことはないというわけだ。」

そう思いたければ思えばいいわ。ルース・アニングは男のことが嫌いになって、自分のことでもくならない考えを抱いたまま、男がとっとと帰ってくればいいと思いました。というのも本当に、カンタベリで過ごしたその三か月間というものは驚くばかりのものであったのです。それはたまたま出かけたにすぎなかったのですが、叔母の知り合いだったミス・シャーロット・サールに会いに出かけたときのことをつぶさに覚えていました。雷のことを口にした、ミス・サールのことばをいまでも繰り返すこともできるくらいだ。「夜中に目が覚めたり、雷の音を聞いたりするとね、『誰かが殺された』と思うんだよ。」それから、けばなしで毛足の長い、菱形模様の敷物のことも、それからその老女の、きらきら光って、涙にあふれた茶色の眼、雷のことを言っている間、からの紅茶碗を差しだしていた、そうしたことも目に見えるようでした。そしていつも彼女にはカンタベリ、雷雲と赤みがかかったリンゴの花、建物の長くて灰色の背面が見えるのです。

雷という言葉で、無関心という中年性多血症からくる無意識状態から、ルースは我に返りました。「つづけて、スタンレー、つづけて。」ルースは思いました。つまり、ほかのみんなみたいに、誤解を抱いたままわたしから離れていくことは許さないわ。本当のことをこの男には言ってやる。

「カンタベリが気に入りましたわ。」

ミスタ・サールに、すぐに火がつかしました。それは天分でもあり、欠陥でもあり、運命でもありました。

「お気に召したと」ミスタ・サールは繰り返しました。「だと思えますよ。」

ミスタ・サール、あなたはいい人よ、という言葉で、女の触覚は送り返しました。

二人の眼は合いました。いやぶつかり合いました。というのもそれぞれが、のけ者にされた者

が突如立ち上がり、外套を脱ぎ捨て、もう一方に対峙するのを、眼の奥で感じたからです。浅薄で敏捷な相手が宙返りをし、手招きして、ショーを続けている間、その者は暗闇に座っているのです。それは怖いものでした。恐ろしいものでした。二人は歳をとり、世慣れ、口先がうまくなっていました。そうしてロデリック・サールはひとシーズンのうちに、たぶんいくつものパーティに出て、変わったことはなにも感じず、あるいはただ感傷的な後悔を、またすてきなこころの中の絵、たとえば花が咲いている桜の木のようなたとえをのぞむ欲求しか感じないのです。そしていつもサールの中には仲間に対する一種の優越感、未開発の資源があるという感覚が、かき混ぜられることもなく、澱を作っていました。これらのもののために人生にも、自分自身にも不満を抱えたまま、あくびをしながら、心をうつろにし、気まぐれな気持ちで家に帰るのです。でもいまや、きわめて突然、霧の中の白い稲妻のようにそれは起こったのです(でもこのこころの中の絵は、当然のことながら、稲妻と結びつき、現れてきました)。人生の、あの喜び、抵抗できない攻撃。というのもそれは、喜び、若返り、血管と神経を氷と炎の糸で満たすと同時に、不愉快なものでした。それは恐ろしいものでした。「二十年前のカンタベリは」ミス・アニングが、強い光に覆いを掛けるように、熟れすぎの桃を緑の葉で覆うように、言いました。それはあまりに強く、熟しすぎ、豊かなものでした。

結婚していたらよかったと、ルースはときには、思うこともありました。中年の冷やかな平和は、身体と心を痛手から守る、反射的に働く知恵と一緒にあって、カンタベリの雷や赤みがかったリンゴの花と比べると、さもしいと、ときには、ミス・アニングには思えました。ルースはもっとほかのことを考えてもよかったです。稲妻のこととか、それももっと激しいものを。身体に感じる感覚を想像してもよかったです。それとももっとほかのことを……。

そして、妙なことに、というのもミス・アニングはミスタ・サールには会ったことがなかったのですから、ミス・アニングの、ぞくぞくしてけんつくを食らわされた感覚、あの触手はいまや言葉を送り出しはせず、まるで自分とミスタ・サールが完全な知り合いであるかのように、動かず、実際のところ、それほど身近に一体のものとなり、この流れの中に隣り合って浮かんでいるだけでよかったです。

なによりも、人間の関係ほど妙なものはない、ミス・アニングは思いました。その移ろい易さ、異常なまでに理屈の通らない不合理、いまではもっとも激しい熱狂的な愛情になってしまった自分の嫌悪のために。でも「愛情」という言葉が浮かぶと、ミス・アニングはそれを否定し、心というものがなんと不明瞭なものかを考えました。こうしたびっくりするような認識を、交代にやってくる苦しみと喜びを、表現する言葉のなんと少ないこと。だって、これをなんと呼んだらいいの。これがいまミス・アニングの感じていることでした。人間的愛情の衰え、サールがいなくなること、見苦しくないように人の眼からは、みんなが隠しておこうとするほどの、人間性にとってはわびしくみじめなものを隠す、当面の必要。この衰え。信頼の侵害。そしてなんらかの品のある、人が認める、みんなが受け入れる葬式のかたちを求めて、こう言いました。

「もちろん、なにをやろうと、誰にもカンタベリを汚すことはできませんわ。」

ミスタ・サールはほほえみました。その言葉を受け入れました。そして足を組み直しました。ミス・アニングは自分の役割をこなし、ミスタ・サールも自分の役割を果たしたのです。そうしてことは終わりを迎えました。そして、ふたりには、あの無感覚な感情の空白が、すぐさまおそってきました。心から、もうなにも飛び出してこない。壁が石版みたいに見える。空虚さが人の心を痛めつける。そして眼が、無感覚になり、動かなくなって、同じ場所、敷物の模様とか石炭入れとかを（何の感情も、考えも印象も、それを変化させ、修正し、飾り立てたりするようにならないが故に、感情の泉が密閉されるが故に）恐ろしい厳格さでじっと見ている。こころが硬直して、体もこわばって、銅像のようになっていました。それでミスタ・サールもミス・アニングも動くことも声を出すこともできませんでした。それでふたりともマイラ・カートライトがミスタ・サールの肩をちゃめっぽく叩いてこう言ったときに、魔法使いがふたりを自由にしてくれて、命の泉があらゆる血管にほとばしりはじめたように思ったのです。

「わたくし、マイスター・ジンガーの公演でお見かけしましたわ。知らぬふりをなさって。いけない方。」とミス・カートライトは言いました。「あなたって、二度と声をおかけできる方ではありませんわ。」

そしてふたりは離れることができたのです。